



JSBMR Newsletter No. 18

日本骨代謝学会／The Japanese Society for Bone and Mineral Research

〒612-8082 京都市伏見区両替町 2-348-302 アカデミック・スクエア内

TEL: 075-468-8772 FAX: 075-468-8773 E-mail: jsbmr@ac-square.co.jp http://jsbmr.umin.jp

第30回日本骨代謝学会学術集会 開催案内

会 期: 2012年7月19日(木)～7月21日(土)

会 場: 京王プラザホテル(新宿)

会 長: 加藤 茂明

ホームページ: <http://www2.convention.co.jp/30jsbmr>

会長挨拶: 第30回日本骨代謝学会学術集会を開催するにあたり

第30回日本骨代謝学会学術集会 会長
加藤 茂明

この度、平成24年7月19日(木)～21日(土)に東京新宿京王プラザホテルで開催されます第30回日本骨代謝学会の大会長を務めさせて頂くこととなりました。つきましては学会員の皆様におかれましては有意義な学術集会となるように力添えを何卒よろしく御願い申し上げます。

日本骨代謝学会(JSBMR)は、30年目を迎え、大きくかつ成熟した学会になりつつあります。これは黎明期からの諸先生方や関連する産業界の皆様の並々ならぬ熱意と努力の礎があったからこそと思います。近年では伝統ある骨細胞生物学を柱に近代生物学の進展を取り込み、基礎研究分野は大きく発展し、もはや世界全体を先導する立場にいます。一方臨床研究では先達の先見の明により、いち早く骨代謝疾患治療薬の応用やその作用機序に関する研究を始めており、現在大きく花開いております。今年度のサブテーマを「骨の不思議を紐解く」としましたが、これはこれまでの成果を踏まえ、基礎・臨床両面から俯瞰しても、未だ未知な部分が多く、今後の発展が多いに期待されるからであります。今後も世界をリードすべく、前回に引続き演題名の英語表記、発表スライドの英語記載を求め、学会ホームページは英語バージョンも作成致します。海外からも複数の著名研究者の招聘を予定しており、また若手海外研究者を含めた合同国際シンポジウムも予定し、会員増加傾向にある本会の発展に寄与できるよう期待しております。最後になりましたが、我が国の骨代謝基礎・臨床研究の更なる発展を目指し、一人でも多くの会員に参加して頂けますよう、主催者一同祈念しております。

*新しい情報、学会内容はホームページ(<http://www2.convention.co.jp/30jsbmr>)に随時掲載、更新いたします。

一名 名誉会員からのメッセージ
骨代謝研究と私

神戸大学名誉教授 葛城病院名誉院長

藤田 拓男

本邦での本格的な骨代謝の研究の始まりを示す出来事の1つは、昭和42年6月に東京大学医学図書館の会議室で行われた第1回骨代謝研究会である。全く新しい発想の研究会として、果たして参加者が集まるかどうか心配して北は東北大学、南は九州大学まで前の日までお願いの電話を掛けたりして気をもんでいたもので、16人の出席を確認してほっとした。恩師の東大老年病の吉川政己教授と慈恵医大整形外科の伊丹康人教授を中心に、東大の津山直一、細谷憲政、東京医科歯科大の佐々木哲、青池勇雄、順天堂大の大野丞二教授等の御意見を頂いて慈恵医大の大島襄先生と私が実務を担当して数年にわたり準備した結果がようやく実を結んだ瞬間である。アメリカで同じような学会として American Society of Bone and Mineral Research (ASBMR) が作られたのはこの数年後である。第2回骨代謝研究会は慈恵医大講堂で行われたが、その後大学紛争が起こり、小石川のエーザイ本社講堂を借りて集会を続けた後、やっと都市センターホールなど通常の学会場を使える程会員も増え、日本骨代謝学会に移行した。

骨代謝という言葉自身が新造語であった。古来直接骨を扱ってきた整形外科、その構成成分であるカルシウムその他のミネラルや結合組織に注目し始めた内分泌代謝学、栄養学、妊娠・出産・閉経や成長を介して骨やミネラルの問題に直面する産婦人科・小児科、これらすべてに関連する疫学、薬学等のすべてを包括するのにできるだけふさわしいものとして合意された。最近増えてきている多分野の総合学会の趨勢ともいえる日本骨代謝学会は今後ますます発展し、さらに他の学会との共同活動を発展させて行くことが期待される。

日本骨代謝学会の最大の貢献は学会とともに発展し最近 impact factor が 2.0 を超えた Journal of Bone and Mineral Metabolism (JBMM) を生み出したことであろう。骨代謝すなわち Bone Metabolism はここでも生きている。ASBMR の機関誌である Journal of Bone and Mineral Research (JBMR) とは Metabolism と Research の1語違いでよく似ているので間違われることもあるが、残念ながら世界最高水準の骨代謝研究雑誌である JBMR に比べると、JBMM はまだまだである。私が初代編集委員長としてこの雑誌を発足させた頃はまともに英文原著の書ける人はほとんどいなかったもので、原稿が集まらず、雑誌の存続が危ぶまれる状態が続いた。何とか各方面に無理をお願いして何でも書いていただくのが精一杯で、論文審査どころではなかった。学会の発展とともに日本の骨代謝学の水準は飛躍的に高まり、鈴木不二男委員長の大改革とレフェリー制の確立を経て、JBMM は生まれ変わり、現在の清野佳紀委員長に至っており、今では世界でも JBMM は審査の厳しい信頼できる雑誌として認められている。

研究の成果は何処かに発表しなければ世の中の役には立たない。戦後学会活動や学会雑誌が復活し、独創的な原著論文も出版される道が開けたが世界に対する関心の高まりとともに抄録だけ英文にするという習慣が出来た。私も東大老人科時代、同じ赤煉瓦館に研究室があったよしみで日本整形外科雑誌の英文抄録すべて目を通すという仕事を引き受けたことがあった。よく考えてみると原著論文を書く能力が無く、あるいは内容それに値しないからせめて抄録だけ、または図表だけを英語にして研究の内容を知って貰おうと言うのは情けないことであり、国辱ではないかという気がする。たとえ始めは困難もあるにしても、自分が責任をもつ研究を日本の学会にだけ発表し、日本語の論文だけ書いて、審査の厳しい国際雑誌に挑戦して世界の批判を受けないのは怠慢であり、甘えであると考え。日本人の中々脱却できない村意識や島国根性から来ている安易な考え方であろうが、少なくとも科学の持つ普遍性、客観性とは相容れない。私の持論として日本語の論文は論文ではなく、世界のすべての人に理解して貰い、その批判に耐え得る国際語によるものでなければ教育過程のレポート位の意味しかない。いつまでも子供のおもちゃで遊んでいては大人にはなれない。

私が生み、育てた JBMM がすっかり大人になり、厳しくなって最近私の必死で書いた論文の掲載を中々承認しないようになった。どうとう雑誌が私より大きくなったのである。これより確かな成長の証があるだろうか。しかし私の方もいつも負けている訳には行かないので、さらに勉強し、よい論文を書き、雑誌のレベルに追いついて行きたい。今までと同じく、あきらめず努力を続けたい。最後に日本骨代謝学会の将来について勝手なことを言わせて貰えば、学会の発表と討論をすべて英語にすれば、やがては世界に理解されるよい討論と論文が出るのではないだろうか。

2011年度 日本骨代謝学会 会務報告

(2011年4月～2011年7月末)

■2011年度 第1回理事会議事録■

日時: 2011年5月26日(木) 15時15分～17時30分
 会場: 千里ライフサイエンスセンター 6階 601号室
 議事: 本理事会の議事録署名人は、小守理事、杉本理事が担当することとした。

<報告事項>

1. 庶務報告(山口理事)

山口理事より、2011年4月30日時点での会員数および会費納入状況について報告があり、了承した。なお、ワイス(株)より賛助会員退会の申請、およびライオン(株)より賛助会員入会の申請があった旨、報告があった。

2. 各種委員会報告

1) あり方委員会(加藤委員長)

加藤委員長より、第29回日本骨代謝学会学術集會中に行われる若手企画シンポジウム、ならびに今年より、産業界との連携を考慮し、新規の企画として導入した産学連携プログラムについての報告があった。

2) 国際渉外委員会(福本委員長)

福本委員長より、2nd Asia-Pacific Osteoporosis and Bone Meeting being held in conjunction with the ANZBMSにおいて、28名の先生方にTravel Grantを授与する予定である旨、報告があった。なお、2011年のANZBMSの学術集會がIOFのRegionalという位置づけになっており、ANZBMSとIOFの結びつきを考慮すると、今後、国際学会であるIOFとどう関係をどのように進めていくか検討していく必要があることから、協議した結果、IOFのRegional Meetingについて、随時、萩野理事より報告していただいていたかどうかの提案があり、了承した。

3) JBMM 編集委員会(清野委員長)

清野委員長より、JBMMの投稿状況、発行状況等について、主に以下の報告があり、了承した。

- ・採択率は、5月15日現在で、2011年投稿論文:11.1%、2010年度:30.0%、2009年度:36.6%であり、審査が厳しくなっている。
- ・2011年度5月15日時点の国別投稿状況について、日本から33%、海外からは67%であった。
- ・Review Articleの引用回数が多いため、理事各位へ、海外の関連研究者へReview執筆者の紹介を依頼したい。
- ・投稿から判定までの平均日数は採択56日、不採択39日となっている。
- ・平成23年度科学研究費補助金(学術定期刊行物)として490万円の交付内定を受領した。
- ・JBMM発行について、科研費申請に伴い入札を行った結果、引き続きシュプリング・ジャパン(株)と契約を結ぶこととした。
- ・シュプリング社の制作レポートによると、JBMM掲載論文のダウンロード回数は、1年で約7万回である。
- ・今年のIF値の予測は2.0となっている。

4) 臨床プログラム推進委員会(杉本委員長)

杉本委員長より、6つのプロジェクトが現在も進行中であり、

JBMMへの投稿もふまえて、影響力のある臨床の研究テーマを募集している旨、報告があった。

5) 骨粗鬆症患者 QOL 評価検討委員会:報告事項なし

6) 骨密度基準値設定委員会:報告事項なし

7) 広報委員会(伊東理事)

伊東理事より、同委員会の活動について、ホームページならびに会員専用ページ改訂箇所について資料に基づき、報告があった。なお、会員専用ページの掲載情報の募集について、役員各位へ呼びかけがあった。

8) ビスフォスフォネート顎骨壊死検討委員会(米田理事長)

米田理事長より、BRONJの和文完全版「ビスフォスフォネートの有用性と顎骨壊死」について、4月末までに大阪大学出版会へ第1版、第2版を合わせて約6,500部の注文があった旨、報告があった。

9) ステロイド性骨粗鬆症管理と治療のガイドライン改訂委員会(宗圓理事)

宗圓理事より、国内で行っているステロイド性骨粗鬆症の3つのコホートのデータを解析し、日本人のリスクファクター等を洗い直す作業が進行しており、その結果を踏まえて次回委員会を開催する旨、報告があった。

10) 椎体骨折評価委員会(宗圓理事)

宗圓理事より、5月14日に開催された委員会において、脊椎骨折判定基準改訂の検討を行った結果、現在普及しているSQ法とQM法での計測における各問題点を抽出し、その結果を踏まえてデータの分析・論文化を行う予定である旨、報告があった。また、本評価基準に関する出版について、(株)ライフサイエンスから出版を行う前に、JBMMにおいて発表することとする旨を改めて森委員長へ確認した。

11) 会員数増加検討委員会:報告事項なし

12) 原発性骨粗鬆症診断基準改訂検討委員会(太田監事)

太田監事より、日本骨代謝学会を中心として、日本骨粗鬆症学会と合同で本委員会を立ち上げた旨の報告があった。現状では、原発性骨粗鬆症診断基準における日本の診断基準(%表示)とWHOの診断基準(SD表示)が異なることによる不都合が多いことから、本委員会の目的として、日本の診断基準をWHOやISCDの診断基準に近づけること、従来の診断基準との違いを少なくすることなどの報告があった。なお、グローバル化に向けて、%表示だけでなく、L1～L4とL2～L4の呈示等、他の問題も検討していく旨、補足説明があった。

3. 学会誌掲載論文の転載依頼について(米田理事長)

米田理事長より、前回理事会以降に依頼のあった「原発性骨粗鬆症の診断基準」「ステロイドガイドライン」の転載許諾依頼5件について報告があり、承認した。

4. 第29回日本骨代謝学会準備状況について(大菌第29回会長)

大菌会長より、第29回学術集會の最終企画について、特別講演、海外招聘講演、シンポジウムの主要プログラムについて報告があった。また、一般演題について234題の応募があった旨、報告があった。なお、関連学会の取得可能単位、日程、Meet

the Expert の参加登録制度等について、資料に基づき、説明があった。また、今回の企画として、高得点演題セッションを採用した旨、報告があった。

5. 第30回日本骨代謝学会準備状況について(加藤第30回会長)

加藤会長より、第30回学術集会について、2012年7月19日(木)～21日(土)に京王プラザホテルで開催する旨、報告があった。なお、企画の一つとして、日本骨粗鬆症学会とのコラボレーションを考えている旨、説明があった。

6. IBMS2013の開催について(野田会長)

野田会長より、IBMS2013開催について、主に以下の報告があった。

- ・加藤理事がIBMSとJSBMR全体を含めたプログラム委員長に就任し、IBMSとJSBMRの最終的なプログラム委員メンバーの決定を来週中に行う予定である。
- ・製薬協に趣意書を送付したところ、現在3社ほど大口の寄付を提供していただける予定であり、その他の企業も前向きに検討いただいている。
- ・7月27日(水)17時30分～18時30分でIBMS2013組織委員会を開催する予定である。

また、協議した結果、今年のASBMRへ加藤理事が出席できないため、IBMSとJSBMR合同のプログラム委員会の開催を早急に検討する必要があること、具体的なアウトライン、企画の数等をまず決定する必要があることを確認した。また、プログラム委員が演者を兼任することが難しいことから、プログラム委員の選出には注意が必要である旨、合わせて確認した。

<審議事項>

1. 2010年度収支決算報告書(案)について(水沼理事)

水沼理事より、2010年度収支決算報告書(案)について主に以下の報告があり承認した。

<一般会計>

収入の部

- ・会費収入; 予算より減収となっているが、昨年と同程度の納入状況である。
- ・科学研究費補助金; 510万円の採択があった。
- ・広告料; 広告出稿企業が4社増え、656,250円の増収となった。
- ・雑収入; JBMM通常複写許諾料、書籍「ビスフォスフォネートの有用性と顎骨壊死」の印税収入があり、増収となった。
- ・JBMM別刷販売; ステロイドガイドライン転載使用料およびビスフォスフォネート製剤顎骨壊死ポジショニング・ペーパーについて申込があり、2,309,159円の収入があった。

支出の部

- ・学会賞関係費; 2010年度は学会賞の受賞者がいなかったため、予算よりも支出が少ない結果となった。
- ・予備費; Mundy先生がご逝去されたため、Memorial Fundとし

て10万円を寄付した。

<特別会計・国際学術交流基金>

- ・利息収入があり、次年度繰越金は、44,787,100円となった。

2. 2010年度会計監査について(清野監事)

清野監事より、清野、太田両監事が、それぞれ会計監査を行ない、帳簿、伝票および銀行口座残高など資料を確認した結果、経理は適正に執行されていることが報告された。

3. 2011年度予算(案)について(水沼理事)

水沼理事より、2011年度予算(案)について、主に以下の報告があり承認した。

- ・会費収入; 学生会員、単年度会員、過年度会員は若干増額している。
- ・科学研究費補助金; 今年は490万円の科研費の交付内定通知があった。
- ・雑収入; 過去の実績をふまえ、40万円に増額した。
- ・JBMM別刷代・著作権料; 過去の実績をふまえ、40万円に増額した。
- ・学会賞関係費; 過去の実績をふまえ、10万円減額した。
- ・HP、メーリングリスト費について、2010年度に計上していた会員専用ページ初期導入費(20万円)を減額した。

4. 新評議員について

松本副理事長、加藤理事より、今泉和則先生の評議員推薦、ならびに萩野理事、豊島評議員より、岡野徹先生の評議員推薦があり、全会一致で承認した。

5. 学術賞・研究奨励賞・優秀演題賞・JBMM論文賞の選考について(米田理事長)

米田理事長より、各賞応募者の提示があり、事前審査および本理事会での協議の結果、下記の候補者を今年度の受賞とする旨、承認した。

【学術賞】

<基礎系>

保田 尚孝 (オリエンタル酵母工業株式会社バイオ事業部
企画開発グループ)

<内科系>

梶 博史 (近畿大学医学部再生機能医学講座)

<外科系>

斎藤 充 (東京慈恵会医科大学医学部整形外科学講座)

【研究奨励賞】

<基礎系>

西田 崇 (岡山大学大学院医歯薬学総合研究科口腔生
化学分野)

<臨床系>

山本 昌弘 (島根大学医学部内科学講座内科学第一)

【優秀演題賞】

<基礎系>

根岸一古賀 貴子 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科分子情報伝達学)

<基礎系>

牧野 祐司 (東京医科歯科大学大学院グローバル COE 口腔病理学分野)

<臨床系>

宮本 裕也 (慶應義塾大学医学部整形外科)

<臨床系>

増田 裕也 (東京大学医学部整形外科)

<臨床系>

三浦 弘司 (大阪大学医学部小児科)

<臨床系>

日浅 雅博 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部生体情報内科学分野)

【JBMM 論文賞】

白木 正孝 (成人病診療研究所白木医院)

6. 学会賞・尾形賞の選考について(米田理事長)

米田理事長より、今年度の学会賞選考について、推薦が無かったため今年度は該当者無しとする旨の提案があり、承認した。また、尾形賞について、加藤理事より、松本副理事長の推薦があり、全会一致で承認した。

7. IOF-ANZBMS Travel Award 寄付金および支給方法について(米田理事長)

米田理事長より、5月24日現在で3,500,000円のTravel Award 寄付金が集まっている旨、報告があった。なお、Travel Award 受賞者については、査読点数の上位28名を受賞者とし、1名あたり15万円を支給してはどうかとの提案があり、承認した。不足額の70万円については、一旦特別会計より借入する旨、了承した。また、受賞者についてはIOF-ANZBMS 本部へ、演題登録者名簿と突き合わせ作業を行い、登録が完了済みの申込者へ、支給することとした。支給方法および支給時期については、大会当日前に送金することとし、参加後に大会へ参加したことの証明(参加証の提出等)が出来ない場合、または大会に参加をしなかった場合には、Travel Grant の返納を求めることとした。また、返納義務が生じる場合があるという旨を事務局よりTravel Award 受賞者へ伝えることとした。

8. 次期役員および今後の次期役員選考方法について(米田理事長)

米田理事長より、杉本理事(内科系)、松本理事(内科系)、加藤理事(基礎系)、山口理事(基礎系)、清野監事(監事)の5名

が任期満了となる旨報告があった。また、前回理事会以降に、新理事候補者の推薦を募った結果、内科系4名(改選枠2名)、基礎系5名(改選枠2名)、監事3名(改選枠1名)の候補者推薦があった旨、報告があった。

理事・監事による投票の結果、下記の候補者を理事会の満場一致で選出し、評議員会・総会に諮ることとした。

【新役員候補】

理事

<内科系>

・伊東 昌子 → (留任)

・田中 良哉 → (留任)

・杉本 利嗣 → 福本 誠二(東京大医病院・腎臓・内分泌内科)

・松本 俊夫 → 大藪 恵一(大阪大・院・小児科学)

<外科系>

・井樋 栄二 → (留任)

・宗圓 聰 → (留任)

・水沼 英樹 → (留任)

・萩野 浩 → (留任)

<基礎系>

・小守 壽文 → (留任)

・加藤 茂明 → 野田 政樹(東京医歯大・難治疾患研究所)

・山口 朗 → 高橋 直之(松本歯大・総合歯科医学研究所)

・米田 俊之 → (留任)

監事

・太田 博明 → (留任)

・清野 佳紀 → 松本 俊夫(徳島大・院・ヘルスバイオサイエンス研究部)

なお、今後の検討課題として推薦理事の選出方法を考えていくべきとの意見が出された。

■2011年度第2回理事会議事録■

日時: 2011年7月27日(水) 14時30分~16時30分

会場: 大阪国際会議場 11階 会議室 1102

議事:

2011年度第1回理事会議事録(案)の承認

2011年5月26日に開催された2011年度第1回理事会議事録(案)について内容を確認のうえ、承認した。なお、本理事会の議事録署名人は、宗圓理事、萩野理事が担当することとした。

<報告事項>

1. 庶務報告(井樋理事)

井樋理事より、2011年6月30日時点での会員数および会費納入状況について報告があり、了承した。

2. 会計中間報告(杉本理事)

杉本理事より、2011年6月30日時点での会計中間報告があり、了承した。

3. 各種委員会報告

1)あり方委員会(福本委員)

福本委員より、第29回日本骨代謝学会学術集会中に行われる若手企画シンポジウム、産学連携プログラムについての報告があった。

2)国際渉外委員会(福本委員長)

福本委員長より、主に以下の報告があり、了承した。

- Korean Society of Bone Metabolism(KSBM)より、日本骨代謝学会と協力してASBMRやECTSのような機関をアジアに設立したいとの提案があったが、既にThe Second Scientific Meeting of the Asian Federation of Osteoporosis Societies(AFOS)があり、経済的な負担がどの程度発生するかが不透明なことから、見送ることとした。
- Bone, Muscle and Joint Diseases(BMJD)のClaus Christiansen会長より、2012年1月19日～22日にバルセロナにて開催されるBMJDにおいて日本骨代謝学会のシンポジウム開催依頼があったが、必要性和メリットが無いことから、辞退することとした。
- 新委員として田中栄評議員(東京大学医学部附属病院整形外科)を追加することとした。

3)JBMM編集委員会(清野委員長)

清野委員長より、JBMMの投稿状況、発行状況等について、主に以下の報告があり、了承した。

- 採択率は、7月15日現在で、2011年投稿論文:18.5%、2010年度:31.0%、2009年度:36.6%であり、審査が厳しくなっている。
- 2011年度7月15日時点の国別投稿状況について、日本から35%、海外からは65%であった。
- 投稿から判定までの平均日数は採択85日、不採択41日となっている。
- Review Articleの引用回数が多いため、理事各位へ、海外の関連研究者へReview執筆者の紹介を依頼したい。
- 整形外科の分野でレフェリーに適任の先生がいれば紹介してほしい。
- 2010年度のIF値の予測は2.238となり、過去最高値を記録した。

4)臨床プログラム推進委員会(杉本委員長)

杉本委員長より、6つのプロジェクトが現在も進行中であり、骨軟化症の診断マニュアルについては福本委員が作成した案を7月30日の委員会にて検討する予定である旨、報告があった。また、内科系の新たなプロジェクトとして、「副甲状腺機能低下症に対するPTH治療の有用性」を委員会にて提案する予定である旨、報告があった。

5)骨粗鬆症患者 QOL 評価検討委員会:報告事項なし

6)骨密度基準値設定委員会:報告事項なし

7)広報委員会(萩野委員長)

萩野委員長より、次回委員会では引き続きホームページの更新、会員専用ページ、Newsletter について議論する旨、報告があった。なお、キャッチコピーについては全会員を対象に募集を呼びかけたが、未だ応募がないため、今後は委員会で検討していく予定である旨、報告があった。

8)BP製剤関連顎骨壊死検討委員会(米田理事長)

米田理事長より、厚生労働省へ要望書として提出した「ビスフォスフォネート系製剤」の添付文書が更に改訂される予定である旨、報告があった。

9)ステロイド性骨粗鬆症管理と治療のガイドライン改訂委員会(宗圓理事)

宗圓理事より、国内で行っているステロイド性骨粗鬆症の3つのコホートデータを解析し、日本人のリスクファクター等を見直しする作業を進めている旨、報告があった。

10)椎体骨折評価委員会(萩野理事)

萩野理事より、本委員会の活動について、現在普及しているSQ法とQM法での計測における一致率を評価し、その結果を踏まえてデータの分析・論文化を行う予定である旨、報告があった。

11)会員数増加検討委員会(田中委員長)

田中委員長より、本委員会において筋肉、再生、腱、宇宙といった領域の異なる先生方と合同でシンポジウムを開催してはどうかとの提案があり、第29回学術集会において「筋研究の最前線」をテーマにシンポジウムを開催する運びとなった旨、報告があった。また、それ以外の会員増加策については7月28日に開催される委員会にて検討する予定である旨、合わせて報告があった。

12)原発性骨粗鬆症診断基準改訂検討委員会(太田監事)

太田監事より、7月29日に開催される委員会について、まずは委員の役割分担を明確に決定し、今後の検討課題を慎重かつ迅速に議論していきたい旨、報告があった。

4. 第30回日本骨代謝学会準備状況について(加藤第30回会長)

第30回プログラム委員会にて報告

5. IBMS2013の開催について(野田会長)

野田会長より、IBMS2013開催について、主に以下の報告があった。

- 主要プログラムについては、シンポジウムを7つ、ランチョンセミナー、イブニングセミナーを2日間にわたって3つずつ開催を予定している。
- 前回理事会で承認されたSPC委員がIBMSにて承認された。
- 今後の委員会の予定として、8月末までに小委員会の人選、9月にサンディエゴにおいて開催されるSPCにてシンポジウムならびにワークショップの内容を検討、11月に小委員会を開催、2012年1月には親委員会とのメール会議を開催、2月に招待講演者へ招待状を送付する予定である旨、報告があった。

続けて、吉川会長より、Japan Day開催について、主に以下の報

告があった。

- ・主要プログラムについては、サテライトシンポジウムを3つ、ランチョンセミナーを2つ、スポンサーセミナー3つの開催を予定している。
- ・整形外科関連の企業に協賛をお願いしたい。

6. 功労評議員の推薦について(米田理事長)

米田理事長より、2011年4月以降に資格が認められる下記の功労評議員候補者1名について提示があり、全会一致で承認した。

麻生 武志 評議員

7. 学会誌掲載論文の転載許可について(米田理事長)

米田理事長より、前回理事会以降に依頼のあった、「原発性骨粗鬆症の診断基準」の転載許諾依頼1件について報告があり、了承した。

<審議事項>

1. 第32回(2014年)学術集会会長選出について(米田理事長)

米田理事長より、第32回(2014年)学術集会会長について、内科系の担当であることから杉本理事を推薦したい旨、提案があり、全会一致で承認した。

2. 今後の役員選出方法について(米田理事長)

今後の役員選出方法の検討の是非について協議した結果、現行の選出方法を継続していくこととした。

3. その他

- a) 日本骨代謝学会尾形賞の英語表記について
米田理事長より、尾形賞の英語表記の確認があり、JSBMR Ogata Awardとする旨、全会一致で承認した。
- b) 一般財団法人運動器の10年日本協会会員継続について
現在加入している運動器の10年・日本協会より会員継続依頼が届いたことから、継続の可否について、審議した結果、財政面を考慮し、退会する旨、全会一致で承認した。
- c) 2011年度評議員会議事次第について
米田理事長より、評議員会議事次第について提示があり、了承した。

■2011年度第3回理事会(新理事会)議事録■

日時: 2011年7月28日(木) 7時30分~8時30分

会場: 大阪国際会議場 8階 会議室 801

議事:

米田前理事長より、2011年度第2回理事会で承認された新理事4名の紹介があった。続いて新理事より就任の挨拶があった。

1. 議長の選出

本理事会の議長について米田前理事長を選出した。

2. 理事長・副理事長の選出

新理事長および副理事長の選出について協議した結果、理事長に米田俊之理事、副理事長に田中良哉理事の推薦があり、全会一致で承認した。

3. 理事担当役について

理事担当役について協議した結果、理事担当役ならびに各種委員会委員長について下記の体制で進める旨、全会一致で承認した。

<理事担当役>

理事長	米田 俊之
副理事長	田中 良哉
理事	(庶務) 井樋 栄二 (庶務) 大菌 恵一 (財務) 福本 誠二 (財務) 水沼 英樹 (学会誌) 野田 政樹 (広報) 萩野 浩 (渉外) 伊東 昌子 (渉外) 宗圓 聰 (学術) 小守 壽文 (学術) 高橋 直之
監事	太田 博明 松本 俊夫

<各種委員会委員長>

あり方委員会	加藤 茂明
国際渉外委員会	福本 誠二
JBMM 編集委員会	清野 佳紀
臨床プログラム推進委員会	杉本 利嗣
骨粗鬆症患者 QOL 評価検討委員会	遠藤 直人
骨密度基準値設定委員会	福永 仁夫
広報委員会	萩野 浩
BP 製剤顎骨壊死検討委員会	米田 俊之
ステロイド性骨粗鬆症管理と治療ガイドライン改訂委員会	名和田 新
椎体骨折評価委員会(代表委員)	宗圓 聰 萩野 浩
会員数増加検討委員会	田中 良哉
原発性骨粗鬆症診断基準改訂検討委員会	福永 仁夫

■各種委員会■

<第32回JBMM編集委員会>

日時: 2011年7月27日(水)13時45分~14時30分

場 所: 大阪国際会議場 11 階 会議室 1101

清野佳紀委員長が資料に基づき司会進行を行い、以下の事項を承認した。

1. 投稿状況

清野編集委員長より、投稿状況について主に以下の報告があった。

- 2011年1月1日～7月15日の新規投稿は154件となり、論文種類の内訳は、Invited Review3編、Review Article 5編、Original Article 115編、Case Report 21編、Short Communication 9編、Perspective 1編であった。
- 2010年度の採択率は31.0%となり、審査がより厳しくなっている。
- 国別投稿状況としては、2010年度、国内22%、海外78%となっており、2011年7月15日現在では、国内20%、海外80%である。
- 投稿受付からFinal Decisionまでの平均査読日数については、Rejectの場合の査読日数が2010年度平均270日と比べて、153日と短くなっているため、良い傾向である。
- 査読担当状況については、各Associate editorへ均等の担当数となるように割り振りしている。

また、Invited Reviewについては、ダウンロード数や引用回数の増加に直結するため、ぜひ関係の先生方へ投稿を呼び掛けるよう依頼があった。

2. 発行状況

清野編集委員長より、28巻4号～29巻3号の発行状況、掲載論文数、ならびに掲載論文の国内外の内訳について報告があった。

3. オンラインジャーナルダウンロードおよび引用について

清野編集委員長より、オンラインジャーナルダウンロード回数および引用回数について、シュプリンガー社からの資料に基づき、報告があった。また、ダウンロード回数上位論文について、Review articleが多い傾向である旨、補足説明があった。なお、ダウンロードの国別内訳としては、アメリカ、日本、フランスが多いとの報告があった。

4. 2010年度インパクト・ファクター値について

清野編集委員長より、2010年度インパクト・ファクター値について、下記のとおり報告があった。

- 2010年度発表のインパクト・ファクター値は、2.238と発表された。2008年も2.0を記録したが、当時より掲載数が増加しつつも、引用回数も多くなっているため、傾向としては順調に伸びてきている。
<Endocrinology & Metabolism 分野 IF 順位> 72位/116誌 (昨年度 76位/105誌)
<Medicine, Research and Experimental 分野 IF 順位> 47位/106誌 (昨年度 54位/92誌)
- 2010年度の5年インパクト・ファクターは2.188であった。(昨年度1.910)
- 論文タイプ別の平均引用回数では、Review ArticleとSpecial Reportが他と比べて多い。

5. レフェリーの登録について

清野編集委員長より、Review回数上位の査読者の一覧の提示があり、上位10名についてEditorial Boardに未登録の方は、登録を進めることとした。続いて、最終査読日が2007年12月以前となっている査読登録者の一覧があり、Editorial Board登録者が含まれている場合は、名前を割愛してはどうかとの提案があり、了承した。また、Reviewerに適任の方について登録の呼び掛けがあった。なお、大菌委員より、第29回学術集会において、Reviewer回数上位(10位)の査読者について、講演の間のコマースライドで発表予定である旨、報告があった。

<第7回椎体骨折評価委員会>

日時: 2011年11月5日(土) 7時30分～9時00分

場所: 神戸国際会議場 4階 403

出席者: 森 諭史(委員長)、伊東 昌子、遠藤 直人、加藤 義治、宗圓 聰、戸川 大輔、徳橋 泰明、中野 哲雄、萩野 浩、藤原佐枝子(各委員)

同席者: 古賀 肇、田 大己(日本骨粗鬆症学会事務局)、寺崎 繁雄(ライフサイエンス出版株式会社)、日本骨代謝学会事務局

欠席者: 上村夕香里(委員)、芝 朋美(日本骨形態計測学会事務局)

議題:

【報告事項】

1) 第6回委員会議事録を報告した。

2) 椎体骨折SQ法判定(Non-Expert)の進捗状況報告
SQ評価を46名(内科15名、整形外科25名、放射線科6名)に依頼し10月31日時点で34名(内科15名、整形外科13名、放射線科6名)より回答をいただいた。

今後、未提出の医師には依頼委員(徳橋委員、加藤委員)より再度催促していただくことになった。上村先生にデータの解析を依頼することになった。

6名のEXPERT医師による計測を計画することになった。6名が集まり1日で計測を終わらせる案が提案されたが、協議して決めることになった。

3) パブリックコメントの収集

日本放射線医学学会と骨代謝関連3学会のシンポジウムが終了した。来年予定している日本脊椎椎髄病学会(4月19～21日)と日本整形外科学会(5月17～21日)のシンポジウムの企画の進捗状況が報告された。これらの学会シンポジウムでは改訂案を提示してご意見をいただくことになった。

【審議事項】

1) これまでのパブリックコメントに対する回答

①SQ対照表は1993年のオリジナルではなくIOF webに掲載されたものを使用することになった。

②椎体骨折判定における脊椎正面XP、MRとCTの位置付け
脊椎側面X線像で判定できない場合の補助診断として正面XP、MRを位置付ける。CTはすでに骨折を精査するツールとして汎用されているのであえて椎体骨折判定ツールとしては位置付けられないことになった。MRの所見については今後各論として検討す

ることになった。

③用語について

椎体骨折に関連する用語を統一して使用するためにそれぞれの用語を定義することになった。合わせて脆弱性椎体骨折の分類も見直すことになった。中野先生が用語定義の草案を提示することになった。

2) 椎体骨折判定基準(改訂版)草案

改訂案が提示された。現行判定基準に SQ 法を追加し、脊椎正面 XP と MR を補助診断として追加することになった。改訂文は A4、1枚程度に簡潔にまとめることになった。来年の日本骨粗鬆症学会で改訂案を公表できるように準備を進めることになった。

3) 次回の委員会の日時

日本骨形態計測学会(大阪)6月7~9日会期中に開催することになった。

<第1回原発性骨粗鬆症診断基準改訂検討委員会>

日時: 2011年7月29日(金) 9時00分~10時30分
場所: リーガロイヤルホテル大阪 2階 ウェストウイング楼の間
出席者: 福永 仁夫(委員長)、遠藤 直人、五來 逸雄、白木 正孝、杉本 利嗣、宗園 聡、曾根 照喜、萩野 浩、藤原佐枝子、細井 孝之(各委員)、友光 達志(アドバイザー)、太田 博明(オブザーバー)
同席者: 古賀 肇、田 大己(日本骨粗鬆症学会事務局)、日本骨代謝学会事務局
欠席者: 米田 俊之(オブザーバー)

福永委員長より、開会の挨拶があり、本委員会の発足について経緯の説明があった。

議題:

1. 委員長代行、副委員長の選任について

福永委員長より、委員長代行として宗園委員、副委員長として杉本委員の推薦があり、全会一致で承認された。

2. 診断基準作成の現在までの経緯について

福永委員長より、原発性骨粗鬆症診断基準作成の現在までの経緯について、以下の報告があった。

- 1994年 WHO が骨粗鬆症の BMD (BMC) に基づいた診断カテゴリー(Normal: YAM(若年成人の平均)の-1.0SD 以上、Osteopenia: -1.0SD から-2.5SD まで、Osteoporosis: -2.5SD 以上、Severe Osteoporosis: 更に脆弱性骨折(+))を発表した。日本骨代謝学会はそれに呼応して 1995 年度版原発性骨粗鬆症の診断基準を発表した。
- しかし、当初から、SD 表記は実地医家には馴染みにくいという意見があったこと、またこの時期に、橈骨専用の国産 BMD 測定装置の普及が著しく、これらの装置では WHO が提唱する骨粗鬆症の cut-off 値(-2.5SD)は、osteopenia に相当するという問題が指摘された。そこで、1996 年度版では SD 表記を見直した。そして、各測定法、各測定部位について、椎体骨折の有無を効率良く区別できる BMD 値を ROC 解析から求め

たところ、その cut-off 値は YAM の約 70%であることが判明した。また、腰椎 BMD では骨粗鬆症は YAM の 70%がほぼ -2.5SD に、osteopenia は 80%がほぼ -1.5SD に相当することが示された。

- 2000 年度版では、脆弱性骨折の有無で適用を分け、そして骨密度値または脊椎 X 線像での骨粗鬆化の所見から判定することを基本とした。また、国内の状況(橈骨 DXA が主流)を考慮した診断基準(YAM の 70%)となっていたため、診断基準は広く普及し、ある程度定着していた。しかし、その後 10 年以上が経過し、国際的な診断基準の整合性が必要であるという意見が提出された。そこで日本骨代謝学会ならびに日本骨粗鬆症学会の各理事会において、診断基準の見直しについての提案があり、いずれも承認され、本委員会が結成された。

診断基準作成の現在までの経緯について委員より以下の意見が出された。

- 疫学分野では SD 表記が分かりやすい。
- 患者に骨粗鬆症の説明を行う場合には、%表記が非常に分かりやすいため、%表記は残しておいた方がよい。
- 日本の診断基準は適用が厳しいため、治療の早期介入が難しい。

3. 本委員会の目的について

本委員会の 4 つの目的について福永委員長が説明を行った後、委員より以下の意見が出された。

—WHO や ISCD の診断基準に近づける

- 日本の診断基準において導入している脆弱性骨折の有無は残したほうがよい。
- 既存骨折の有無を把握せずに治療が開始されるリスクがあるため胸・腰椎の X 線撮影は、外すべきでない。
- 脊椎 X 線写真による骨粗鬆症化の判定(骨萎縮度判定基準)は外した方がよい。
- 国産の橈骨 DXA 装置では SD 表記が適さないことから、SD と%の両併記が良い。

—従来の診断基準との違いを少なくする

- 日本の診断基準では、骨萎縮度分類の I 度を osteopenia とした。そして、これは T-Score で -1.5 に相当した。また、-1.0SD に設定した場合、該当する患者数が多くなる懸念が指摘された。

—治療適応の患者が骨粗鬆症と診断されるようにする

- 現行の診断基準である YAM の 70%では、本来治療されるべき患者を見逃している可能性がある。
- この問題については、骨粗鬆症に対してどのように取り組むかという方向性や考え方の問題であり、本委員会ではなく、各学会の理事会などにて検討されるべきである。
- 現行の診断基準を世界基準に近づけるならば、osteopenia の基準も大きな問題となる。

—軽度の骨量低下を骨量測定のみで骨粗鬆症と判定しないようにする

- 2000 年度版では、「低骨量をきたす骨粗鬆症以外の疾患または続発性骨粗鬆症を認めず」と冒頭に記載されているので、従来通りでよい。
- まず鑑別診断、除外診断をしてから、判定を行うべきである。

4. 検討すべき事項について

日本の診断基準とWHOの診断基準との違いは、下記4項目について、以下の意見が出され、今後検討していくこととなった。

①SD表記(WHO)または%表記(日本)のいずれか、または両方を併記しますか？

- ・SDを併記することによって、海外の臨床治験にも参加しやすく、比較も行いやすくなる。
- ・併記するとBMD値が数%変わってくるので、その取り扱いを考えなくてはならない。
- ・腰椎は併記しても、 $-2.5SD$ と70%との間には大きい変化がないため、併記しやすい。
- ・大腿骨については従来YAMを示す年齢の決定など十分に検討されていない。今回の診断基準に掲載しても良いのではないか。

②osteopeniaの定義は、YAMの $-1.0SD$ (WHO)または $-1.5SD$ (日本)のいずれにしますか？

- ・osteopeniaの日本語訳として、「骨量減少」、「骨減少症」などが考えられる。
- ・萩野先生から山本吉蔵先生に、osteopeniaの日本語訳を伺って頂いてはどうか。

③脆弱性骨折の有無による適用の分類(日本)はどうしますか？

- ・脆弱性骨折の有無による分類は現行のまま残すべきである。また、この方法の有用性を説明するためには、エビデンスを収集する必要がある。
- ・椎体骨折評価委員会で決定した椎体骨折の定義などを本診断基準に取り入れても良いのではないかと。

④severe osteoporosisの定義(WHO)はどうしますか？

- ・WHOの診断カテゴリーにsevere osteoporosisが入っていたのは、ビスホスホネート治療の適応患者を選ぶためである。
- ・本診断基準に採用するならば、定義を明確にしなければならない。

また、BMDの測定部位、測定方法とcut-off値の関係は、下記の5項目について、以下の意見が出され、今後検討していくこととなった。

①L1~L4とL2~L4の両方のBMDを呈示しますか？

- ・両方の呈示をするのが良い。

②椎体毎の平均値、SDも必要でしょうか？

- ・椎体毎の平均値を算出してもあまり使用されないのでは、必要ない。(注:L1~L4間に椎体骨折が生じた場合には、その椎体を除外し非骨折椎体のBMD値から判定することができるように、各椎体の平均BMD値も算出してはどうかという意見が委員会終了後にありました。)

③我が国で普及した橈骨(国産)と中手骨(MD)のBMDの取り扱いについては、SD表記ではなく%表記が良いでしょうか？

- ・橈骨国産ならびに中手骨は国際基準ではないので、SD表記ではなく%表記のままで良い。

④男性の診断基準は大腿骨のみにしますか？腰椎も採用しますか？

- ・現行の診断基準同様、大腿骨のみで良い。

⑤QUSは採用しますか？

- ・骨折のリスク評価には使用されているが、現行の診断基準には用いられていない。QUSを入れることには抵抗がある。

5. 委員の役割分担の決定について

福永委員長より、各委員の役割分担ならびに検討事項について下記の提案があり、承認された。

- ・遠藤委員・・・SD表記と%表記について(各々のメリット、海外での状況、日本での経緯、日本の骨粗鬆症診療における現状、併記すべきかどうかなど)
- ・五來委員・・・osteopeniaについて
- ・宗圓委員長代行・・・脆弱性骨折について
- ・白木委員・・・severe osteoporosisについて
- ・萩野委員・・・L1~L4、L2~L4のBMDについて(それぞれのメリット・デメリット)
- ・曾根委員・・・橈骨、中手骨の%表記について
- ・藤原委員・・・男性骨粗鬆症ならびにQUSの採用について
- ・太田委員・・・若年者での大腿骨について(YAM値の検討)
- ・杉本副委員長・・・全体的な統括

なお、BMDデータが必要な場合は、データ管理の担当である曾根委員ならびに藤原委員へ連絡することとなった。

6. その他

第2回委員会は日本骨粗鬆症学会会期中(平成23年11月3日(木・祝)21:00~)とし、次回委員会開催の1ヶ月前(10月3日(月))までに各委員が担当している検討事項の進捗状況を日本骨代謝学会事務局宛に報告することとした。

<第2回原発性骨粗鬆症診断基準改訂検討委員会>

日時： 2011年11月3日(木) 21時00分~22時50分
場所： 神戸ポートピアホテル 南館 B1F カトレア・ライラック
出席者： 福永 仁夫(委員長)、杉本 利嗣(副委員長)、宗圓 聰(委員長代行)、遠藤 直人、五來 逸雄、白木 正孝、曾根 照喜、萩野 浩、藤原佐枝子、細井 孝之(各委員)、太田 博明(オブザーバー)
同席者： 古賀 肇、田 大己(日本骨粗鬆症学会事務局)、日本骨代謝学会事務局
欠席者： 友光 達志(アドバイザー)、米田 俊之(オブザーバー)

議題：

1. 第1回委員会の議事録(案)確認
2. 各委員の分担事項について
各事項について分担者より報告があり、それについて討議した。
 - 1) SD表記と%表記について(遠藤直人委員)
わが国の1995年の診断基準ではSD表記、1996年以降は%表記である。国際化とこれまでの利用を考慮し、両者を併記することとした。
 - 2) osteopeniaについて(五來逸雄委員)
用語は「骨量減少、low bone mass(osteopenia)」とし、目的は「薬物治療を考慮する対象の一部である」と設定する。
 - 3) 脆弱性骨折について(宗圓 聰委員長代行)
既存脆弱性骨折のうち、椎体骨折の存在による新規骨折リスクは4倍前後であり、大腿骨近位部骨折の存在による新規大腿骨近位部骨折リスクは2.5から6倍強であるが、その他の骨折の存在によるリスクはより低く、全骨折の存在によるリスクは約2倍で

ある。また、既存椎体骨折を有する骨量減少例の新規骨折リスクは既存骨折のない骨粗鬆症例の新規骨折リスクの約 1.6 倍である。これらのことから、既存脆弱性骨折のうち、椎体および大腿骨近位部骨折があれば骨密度と関係なく骨粗鬆症、その他の骨折がある場合は骨量減少例を骨粗鬆症とすることとした。

4) severe osteoporosis について(白木正孝委員)
severe osteoporosis とは、既存脆弱性骨折の存在する例、および骨密度低下の大きい例(-3SDor-3.5SD?, 60%YAM?, 基準は未定)とすることとした。

5) L1~L4, L2~L4 の BMD について(萩野 浩委員)
両者を併記することとした。また、評価できない椎体が存在する場合はそれを除外した椎体が 2 個以上あればその平均値で判定してよいこととした (ISCD の規定)。

6) 橈骨、中手骨の%表記について(曾根照喜委員)
橈骨および第二中手骨については ROC 解析の結果は-2.5SD よりも 70%YAM に近く、%表記のみとすることとした。

7) 男性骨粗鬆症ならびに QUS の採用について(藤原佐枝子委員)
男性においても腰椎 BMD のみで診断される例はあり、大腿骨のみでなく腰椎も採用することとした。QUS で要精査と判定された例で、BMD により骨粗鬆症と診断されるのは 50 歳代女性で 25%、80 歳代女性で 66%であり、診断基準には採用できないと判断した。

8) 若年者での大腿骨について(YAM 値の検討)(太田博明オプザーバー)
腰椎の YAM は BMD がピーク値と同程度に維持されている 20~44 歳で YAM 値を決定しているが、大腿骨(total hip)の BMD はより若年から減少する。ある程度の症例数がある 20~29 歳のデータから YAM 値を再検討することとした。

3. その他

1) 骨粗鬆症の診断としての BMD 値は国際的には-2.5SD、わが国では 70%YAM であるが、腰椎においては-2.5SDと 70%YAM はほぼ一致しており、そのままの併記で可能と思われる。大腿骨においては、現在の YAM 値による SD ならびに%は total hip、neck とともに両者に乖離がみられる。ただし、大腿骨の YAM 値を再検討することとなり、その結果を待って再検討することとした。

2) 骨量減少の診断としての BMD 値は国際的には-1.0SD、わが国では 80%YAM である。80%YAM はほぼ-1.5SD に相当する。これについても大腿骨の YAM 値の再検討結果を待って再検討することとした。

3) 既存脆弱性骨折に関する考え方は、現在改訂作業中の骨粗鬆症の予防と治療ガイドラインにおける薬物治療開始基準との関連もあり、第 13 回日本骨粗鬆症学会のシンポジウムにて細井孝之委員から紹介された。

今後の学会予定

●IBMS JSBMR 2013 (第 31 回日本骨代謝学会学術集会)

2nd Joint Meeting of the International Bone and Mineral Society and the Japanese Society for Bone and Mineral Research
会 期: 2013 年 5 月 28 日(火)~6 月 1 日(土)
会 場: 神戸国際会議場、ポートピアホテル

Chair : 野田 政樹(東京医科歯科大学難治疾患研究所分子薬理学)

Japan Day 会長 : 吉川 秀樹(大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学)

●第 32 回日本骨代謝学会学術集会

会 期: 2014 年 7 月 24 日(木)~26 日(土)
会 場: 大阪国際会議場
会 長: 杉本 利嗣(島根大学医学部内科学講座内科学第一)

関連学会の大会開催予定

●第 6 回 Bone Research Seminar

会 期: 2012 年 2 月 17 日(金)~18 日(土)
会 場: 東京コンファレンスセンター・品川
(〒108-0075 東京都港区港南 1-9-36 フレア品川)
ホームページ: <http://conet-cap.jp/bresearch>

●The 39th European Symposium on Calcified Tissues

会 期: 2012 年 5 月 19 日(土)~23 日(水)
会 場: Stockholm(Sweden)
ホームページ: <http://www.ectsoc.org>
E-mail: admin@ectsoc.org

●第 32 回日本骨形態計測学会

会 期: 2012 年 6 月 7 日(木)~9 日(土)
会 場: 大阪国際会議場
会 長: 三木 隆己(大阪市立大学大学院医学研究科老年内科講座(老年内科・神経内科))
テーマ: 基礎から臨床へ
ホームページ:
<http://www.med.osaka-cu.ac.jp/GeriatNeuro/JSBM2012/>

●第 24 回日本運動器科学会

会 期: 2012 年 7 月 7 日(土)
会 場: 京王プラザホテル(新宿)
会 長: 山本 謙吾(東京医科大学整形外科教室)
ホームページ: <http://jsmr24.jp>

●第 45 回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会

会 期: 2012 年 7 月 14 日(土)~15 日(日)
会 場: 東京国際フォーラム
会 長: 望月 一男(杏林大学医学部整形外科教室)
テーマ: 整形外科で扱う腫瘍性疾患に対する“原点”の再確認
— 実地医家が扱ってよい範囲と専門施設の役割 —
ホームページ: <http://www.congre.co.jp/joa-tumor45>

●第 9 回 Bone Biology Forum

会 期: 2012 年 8 月 24 日(金)13 時~25 日(土)15 時(予定)
会 場: 富士教育研究所
(〒410-1105 静岡県裾野市下和田 656 TEL:055-997-0111)
ホームページ: <http://www.bone-biology.com>

特別講演

- ① Henry Kronenberg 先生(Harvard Medical School)
- ② Joseph Penninger 先生(Institute of Molecular Biotechnology of Austrian Academy of Sciences)

③ 宮園浩平先生(東京大学大学院医学研究科分子病理学分野)

その他、一般講演・話題提供等

参加費：一般 10,000 円、学生 3,000 円

問合せ先：第 9 回 Bone Biology Forum 運営事務局
(9th_meeting_bbf2012@ac-square.co.jp)

●第 38 回日本整形外科学会スポーツ医学会学術集会

会期：2012 年 9 月 14 日(金)～15 日(土)

会場：パシフィコ横浜

会長：筒井 廣明(昭和大学藤が丘リハビリテーション病院
スポーツ整形外科)

テーマ：スポーツと整形外科の Cross-Link

演題募集：一般演題をオンラインのみで公募いたします。
詳しくは HP をご覧ください。

ホームページ：<http://www.issjp.com/jossm2012>

●The ASBMR (The American Society for Bone and Mineral Research) 2012 Annual Meeting

会期：2012 年 10 月 12 日(金)～15 日(月)

会場：Minneapolis, Minnesota (USA)

ホームページ：

<http://www.asbmr.org/Meetings/AnnualMeeting.aspx>

●第 6 回 骨・軟骨フロンティア(BCF)

The 6th Meeting of Bone and Cartilage Frontier

会期：2012 年 11 月 17 日(土) 13 時～18 時 30 分

会場：ベルサール八重洲

東京都中央区八重洲 1-3-7

八重洲ファーストフィナンシャルビル 3F

共催：骨・軟骨フロンティア/旭化成ファーマ株式会社

事務局：東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科口腔病理学分野

FAX: 03-5803-0188

E-Mail: bc_frontier@mail.goo.ne.jp

IBMS への入会のご案内

The International Bone and Mineral Society (IBMS)は世界 64 カ国に会員約 2,500 名を有する世界最大規模の骨代謝分野の国際学会です。IBMS は日本骨代謝学会、European Calcified Tissue Society (ECTS) および The American Society for Bone and Mineral Research (ASBMR)と 2 年に 1 度 Joint Meeting を開催し、各地域における研究の発展に尽力しています。

また、2013 年には、日本骨代謝学会との Joint Meeting が開催される予定です。今後もより一層 IBMS との関係をより深めつつ、相互の会員の利益になるため会員の皆様には、ぜひ IBMS へ入会くださいますよう、ご案内申し上げます。

詳しい情報ならびにお申込につきましては、

IBMS ホームページ

<http://www.ibmsonline.org/> membership のページより、ご覧ください。